

博士課程教育リーディングプログラム 平成25年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成25年度		
申請大学名	滋賀医科大学	申請大学長名	馬場 忠雄
申請類型	オンリーワン型	プログラム責任者名	服部 隆則
整理番号	U03	プログラムコーディネーター名	三浦 克之
プログラム名	アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

非感染性疾患（Non-communicable Disease：NCD）は21世紀の健康問題の核心的課題であり、がん、脳心血管疾患、およびその危険因子である糖尿病・高血圧・脂質異常症など生活習慣病の増加という形で顕在化し、アジア新興国において特に深刻な問題となっている。本プログラムの目的は、アジア新興国における健康問題の解決と健康寿命の延伸を実現するためのリーダー育成を行うことである。

本学はこれまで我が国の生活習慣病疫学研究において中心的な役割を果たすとともに、国際共同疫学研究においても国内の他の研究機関の追随を許さない実績を持っている。更に、平成25年10月に「アジア疫学研究センター」が新築・設立されたことで、更なる研究・教育活動が開始されている。本プログラムは、これらの実績により長年蓄積された疫学研究フィールド、疫学データベース、疫学・生物統計学・生活習慣病医学分野での学内の人的資源、国内/国際共同研究・アジア提携校の人的ネットワーク、アジア疫学研究センターという研究教育基盤を最大限に活用して、NCD超克を中心課題とした大学院教育システムの再構築を行い、国内外の産学官の広い分野において活躍し、国際的センスをもつ「行動するトップリーダー」を養成する。

本学では、本プログラムを契機として大学院教育を以下の点で大胆に改革することとしている。

- ①特任教員等として海外で活躍する外国人教員を積極的に雇用し、英語を中心とする教育により海外からの留学生を含めて国際的に活躍する人材を育てる。
- ②短期/長期研修を充実して、講義から研修への教育手法の転換を図る。アジアの公衆衛生現場でのフィールドワーク、民間企業や保健医療行政機関、国際機関でのインターンシップ、海外大学での研究参加などを必須単位とし、現場で活躍する力を付ける。
- ③短期/長期研修での体験を材料とした報告会、シンポジウム等において英語での討論の場を多数作り、国際的な場で討論する能力の向上を図る。

2. プログラムの進捗状況

平成26年度10月入学の初めての学生を迎えるため、学内外での準備作業を進めた。具体的には以下の事項であり、大学院教育部門会議に加え、プログラム担当者を中心とする運営ワーキンググループおよび実務担当者会議を設置し、定期的に会議を開催して進捗管理を行った。

学内環境整備

1. 平成25年10月の採択決定後、教育を担当する適切な教員の雇用を進め、平成25年度内に特任教授1名、特任講師1名、特任助手1名を雇用した。さらに特任教授および特任准教授の雇用のための選考を進めた。また教務担当および会計担当の事務職員2名を雇用し、システム担当事務職員の選考を進めた。
2. リーディングプログラム専用ホームページを日本語、英語版で開設し、国内外に広報が可能となった。
3. リーディングプログラム専用の大学院生室を社会医学講座公衆衛生学部門に隣接して開設し、18名分の学修環境を整備した。
4. アジア疫学研究センター内データ解析室に、リーディングプログラム学生の利用を見込み、新たに解析用ブースを4席増設し、それぞれにデータ解析専用パソコンを設置、さらに2台の共用パソコンを設置しインターネット環境も整備した。これによりプログラム学生の学修環境がいっそう整えられた。
5. リーディングプログラム教育用システムサーバーを設置、国際会議システムを導入した。これにより海外協力施設、海外提携校とのネットワークがさらに緊密化し、プログラムにおけるアジア・フィールドワーク、海外インターンシップ、研究参加が充実する。さらには海外の客員教員や研究者による講義、講演の実施、研究内容の議論が可能となった。海外提携校からの入学志願者の面接選考にも使用する予定である。
6. 教員の英語による教育スキルアップを目的として、教員を対象としたFD研修「How to conduct effective lessons in ENGLISH」(2日コース)を2回に渡って学内開催し、計16名が研鑽を積んだ。
7. 平成26年度10月入学者選抜の準備を進めた。海外協定校特別入試と一般入試にわけるなどの方針を決定し、応募要項、出願書類の作成を進めた。
8. リーディングプログラム授業科目表を作成し、大学院委員会にて承認された。これに伴い授業準備を進めており、履修案内(シラバス)の作成を進めた。
9. その他、学生が利用する関連書籍、備品の購入を随時進めた。

学外環境整備

1. 疫学研究の共同研究者であり、客員准教授かつプログラム担当者である米国ピッツバーグ大学の先生、及び客員准教授であるドレクセル大学の先生を、それぞれプログラムコーディネーターの教授、准教授、特任教授が訪問し、国際標準の博士課程教育プログラムをいかにして取り入れるかなどについて具体的な検討を行った。プログラムにおける研修および現地準備室設置の打ち合わせも行った。また客員教授をお願いするハーバード大学教授、及び客員教授である北京大学教授とも打ち合わせを実施した。
2. アジア提携校等にプログラム担当者5名他が赴き教育についての打ち合わせを行った。ホーチミン医科薬科大学(ベトナム)、チョーライ病院(ベトナム)、国立インドネシア大学(インドネシア)、マレーシア国民大学(マレーシア)の各校をそれぞれ担当ごとに視察、プログラムにおけるフィールドワーク、研修の打ち合わせと下準備を行った。

学生募集活動

1. 国内の応募者向けに、東京、大阪において2回募集説明会を行った。
2. 説明会に先立ち、プログラムの概略と説明会に関するポスター、チラシを全国の大学医学部、薬学部、看護学部修士課程、栄養学部、および公衆衛生大学院183校に送付し本プログラムの理念、教育理念・教育目標の広報につとめた。
3. アジア提携校等へのプログラム説明会として、ホーチミン医科薬科大学(ベトナム)、チョーライ病院(ベトナム)、国立インドネシア大学(インドネシア)、マレーシア国民大学(マレーシア)にて、本学の理念、教育理念・教育目標と具体的な募集情報提供を行った。多数の入学希望者が説明会に参加した。
4. 中国などその他の提携校に対しても、本学国際交流支援室、学内共同研究者などを通じてプログラムの情報を広報し、反響を得た。